



Title	20世紀イギリスにおけるモダン・タイポグラフィの形成過程
Author(s)	山本, 政幸
Citation	デザイン理論. 2011, 57, p. 126-127
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53494
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

20世紀イギリスにおけるモダン・タイポグラフィの形成過程

山本政幸／多摩美術大学

1920年代後半から30年代にかけての中央ヨーロッパでは、「ニュー・タイポグラフィ」と呼ばれる活版印刷の機能主義的デザイン運動が活発になった。「タイポグラフィは伝達の道具である」(L・モホイ＝ナジ)という新しいデザイン思想にもとづき、サンセリフ体活字や写真による図版、光沢のある塗工紙を採用、非対称のレイアウトによる組版の実験が繰り返された。一方イギリスでは、30年代に入ってもなおアーツ&クラフツ運動の理想を追い求めるプライベート・プレス（注1）がロンドンの内外に多数存在し、古典活字と版画による挿絵、手漉き紙を使った伝統的な書物の造形美を競っていた。その背景では、製紙や印刷、活字鋳造の各プロセスに機械が導入されて大量生産の体制が整い、タイポグラフィの対象は書物の範囲を超え、時事を速報する新聞や雑誌、旅行に使う路線図や時刻表からチケットにいたるまで、生活に密着した印刷物の需要が増していた。さらに30年代にはドイツを離れた気鋭のデザイナーた

ちがロンドンに滞在・移住し、大陸のデザイン思想を紹介した。本考察はこのようなイギリス特有の状況に着目し、伝統の継承、機械化への対応、大陸のタイポグラフィの受容という観点から、20世紀イギリスにおけるモダン・タイポグラフィの形成過程の特徴を探る。

① 伝統の継承……1920年代に刊行された専門誌『Fleuron』（全7巻、1923～30年）（図1）は、印刷・活字に関する多数の論考を収録した私家版印刷^(注1)で、伝統的タイポグラフィの高水準を象徴した。同誌の編集を務めたO・サイモン（第1巻～第4巻）やS・モリソン（第5巻～第7巻）は「新伝統主義」^(注2)と呼ばれる理論家でもあり、大陸のモダニストたちとの距離をとりつつタイポグラフィ本来の使命である書籍印刷を尊重した。その目的は、単に古い様式を保持することだけではなく、伝統技法を継承しながら機械化を受け入れつつ実用と美意識に適った現代のタイポグラフィを追究することにあった。

② 機械化・産業化への対応……19世紀末



図1. 『Fleuron』第7号（1930年）



図2. 『Gill Sans』の見本帳



図3. 『Commercial Art』誌（1930年）

に自動活字鉄植機の開発に成功していたランストン・モノタイプ社^(注3)は1923年にモリソンをアドバイザーとして招き、以後30年代まで《Garamond》や《Baskerville》といった過去の優れた活字の復刻をシリーズ化する。この間、モリソンは古典活字の美しさを維持したまま新聞印刷に必要な可読性を備え、かつ高速輪転にも耐えうる現代のローマン体活字として《Times New Roman》(1932年)をデザイン、他方で新しいサンセリフ体活字の開発に向けて彫刻家E・ギルを採用し、完成了《Gill Sans》(1928年)（図2）は鉄道会社L.N.E.R.に採用されるなど、近代産業に受け入れられていった。

③ 大陸のタイポグラフィの受容……「ニュー・タイポグラフィ」運動^(注4)を唱導したJ・チヒヨルトは、『Commercial Art』誌(1930年)（図3・4）や『Circle』誌(1937年)（図5）においてイギリスにその理論を紹介するとともに、ランド・ハンフリーーズ社(1935～38年)やベンギン・ブックス社(1947～49年)での展示や仕事を通じて、理論と実践の両面から新しい組版理論を説いた。他方で古典活字の傑作《Albertus》(1932年)をデザインしたB・ウォルプはフェイバー＆フェイバー社のディレクターに、

H・シュモーラーはロンドンのカーウェン・プレスを経てベンギン社のチヒヨルトの後任となるなど、ドイツのデザイナーが重要な役割を果たしつつ、イギリス独自の近代的な印刷様式が形成された。

(注1) 私家版印刷 (Private Press) ……19世紀に発達した機械生産による書籍印刷・製本の粗悪さを見直し、良質な印刷材料と手仕事によって芸術的な「理想の書物」を目指した世纪末の手工芸運動のひとつ。W・モリスのケルムスコット・プレスの活動を契機に、欧米に広く波及した。

(注2) 新伝統主義 (New Traditionalism) ……O・サイモンやS・モリソンらロンドンのタイポグラファを中心とし、『Fleuron』誌等の機関誌やダブルクラウン・クラブといった会合を通じて、伝統的な書籍印刷の造形美を追究した。ドイツの「ニュー・タイポグラフィ」に対してつくられた語。

(注3) モノタイプ社 (Monotype Corporation) ……1887年、T・ランストンが米国ワシントンDCに設立した自動活字鉄植機メーカー。1897年にイギリス支社を設立、1923年からS・モリソンがタイポグラフィ・ディレクターとなり、古典活字の復刻・機械化や、新書体のプロデュースを手掛ける。

(注4) ニュー・タイポグラフィ (New Typography) ……1923年にL・モホイ＝ナジが提唱し、J・チヒヨルトらが理論的支柱となって展開した活版印刷の機能主義的デザイン運動。構成主義やダダ、新造形主義の芸術家・デザイナーとの交流をもちつつ、30年代にかけて中央ヨーロッパで活発になった。



図4. 『Commercial Art』誌(1930年)に掲載されたチヒヨルトの論文

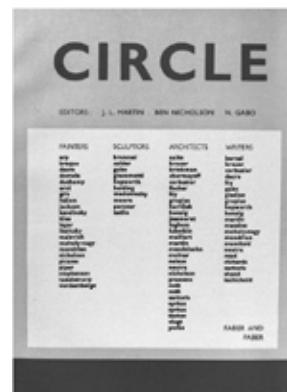


図5. 『Circle』誌(1937年)の表紙